

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 30 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830019

研究課題名（和文） インターネットと社会性・攻撃性
—行動内容への着目および国際比較を通して—研究課題名（英文） Effects of Internet use on Sociability and Aggression:
From the Viewpoint of Behavior on the Internet and Cultural difference.

研究代表者

藤 桂 (FUJI KEI)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号：50581584

研究成果の概要（和文）：

本研究では、縦断的パネル調査および国際比較を通して、(1) インターネット上での行動内容を3領域から測定する尺度の開発、(2) インターネット利用が、現実生活における社会性・攻撃性及びその影響の分析、(3) インターネット上での行動内容に関する日本および韓国の特徴の検討、の3点を実施した。これらの結果より、インターネットが個人に及ぼす影響は、インターネット上での行動内容によって規定されることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

Purpose of this study was to examine the following three problems associated with Internet through longitudinal and cross-national survey. First, the triadic scales that measured the behaviors on the Internet were developed. Second, the effects of Internet use on sociability and aggression on real-life were investigated. Third, cultural differences in behaviors on the Internet between Japan and Korea were explored. Results suggested that differences between behaviors on the Internet determine the effects of the Internet on each user.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	910,000	273,000	1,183,000
2011 年度	1,020,000	306,000	1,326,000
年度			
年度			
年度			
総 計	1,930,000	579,000	2,509,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学，社会心理学

キーワード：インターネット，社会性，攻撃性

1. 研究開始当初の背景

(1) 先行研究の動向

現在、インターネット（以降ネットと略記）は地域・世代を問わず多くの人々に利用され、我々の生活の中に深く浸透している。こうした広範な普及を背景に、ネット利用が及ぼす心理的影響に関しても注目が寄せられてき

た。しかし従来の心理学的研究では、“ネット利用は現実生活での対人的・社会的接触を阻害し、孤独感や攻撃性を増大させる”などのネガティブな影響を主張するものもあれば、“ネット上でのコミュニケーションは、他者との親密な交流を促し、現実での攻撃性を低減させる”などのポジティブな影響を主張するものもあり、影響の方向性（ネガティ

ブか、ポジティブか) に関しては一貫した知見は得られていない。

これらの先行研究のほとんどは、利用時間・頻度の多寡など、ネット利用の量的側面のみに基づいてその影響を予測するものであった。しかし例えば、利用時間が同程度でも、ネット上の他者と親密に交流し続ける場合と、他者に誹謗・中傷を繰り返す場合では、影響の方向性は大きく異なると推察される。すなわち、従来の研究ではまだ十分に検討されていないネット上での行動内容が、ネット利用による影響の方向性を規定する要因となる可能性が考えられる。

(2) 申請者が行ってきた研究

申請者はこの点に着目し、まず、ネット利用者を対象とした半構造化面接やオープン型ウェブ調査によって、実際にネット上でのどのような行動がなされているかについて検討した。その結果、ネット上での行動内容は、大きく「自己の表出」「他者との関係」「现实生活とのバランス」の3領域に整理されることが明らかとなった。また各領域は、さらに3つの下位側面に分類されることも示された。

続いて、ネット上での行動内容が、どのような過程を経て社会性・攻撃性に影響を及ぼすかを検討した。その結果、主として、自己表現を通して自己を客観的に振り返る(自己客観視)行動や、居場所となる集団に所属する(所属感獲得)という行動により、现实生活での社会性は向上していくことが示された。しかし、没入的・依存的にネットを利用し続ける(没入的・依存的関与)際には、現実の対人関係は希薄化していた。さらに、他者への誹謗・中傷を繰り返す(攻撃的言動)ほど、周囲への攻撃性は増大することも示された。すなわち申請者が着目したネット上での行動内容が、现实生活への影響の方向性を規定する要因となることが明らかとなった。

(3) これまでの研究の問題点と本研究計画のアプローチ

しかしこれまで申請者が行ってきた研究は、いずれも一時点での調査に基づくものであり、変数間の因果関係を論じるには不十分であった。したがって、これまでの研究知見をより厳密に検討し拡張していくためには、縦断的パネル調査を実施し、各個人内の変容過程を時系列的に検討していくことが必要となる。こうした縦断的パネル調査は、ネット利用の影響を扱う先行研究において、変数間の因果関係を検討するための有効な方法として用いられてきたが、いずれもネット上での行動内容については検討していない。

したがって、(申請者による独創的アプローチとしての) ネット上での行動内容と、(先行研究で用いられてきたアプローチとして

の) 縦断的パネル調査を組み合わせることで、ネット利用が现实生活に影響を及ぼすまでの過程について、より詳細な検討が可能となると考えられる。

加えて、ネット利用が社会性・攻撃性に及ぼす悪影響は、北米では90年代半ばからすでに深刻視されてきた(Turkle, 1995; Young, 1996)が、近年では韓国でも、政府の介入を必要とするほどの社会問題となっている。こうした現状を踏まえ、现实生活への影響の方向性を規定するネット上での行動内容について、情報技術の発展が著しい韓国との間で比較を行う。そして、これまでの知見を世界的にも応用可能なものへ拡張する。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、以下の3点を本研究の目的とした。

(1) 行動内容を測定する尺度の開発

縦断的パネル調査および国際比較の実施に先駆け、藤・吉田(2009)によって作成されたネット上での行動内容に関する尺度項目の改善、ならびに、信頼性・妥当性の検討を行う。

(2) ネット利用が社会性・攻撃性に及ぼす影響の検討

(1)で開発した尺度を用いて、ネット上での様々な行動が、现实生活における社会性・攻撃性に及ぼす影響について、約12ヶ月の期間をおいた縦断的パネル調査を実施し、検討する。

(3) 日本—韓国間でのネット上での行動内容の比較

(1)で開発した尺度を用いて、ネット上での様々な行動に関して、日本と韓国の間でどのような差異が見られるかについて、比較する。なお、どのような要因によって、行動内容の違いが生まれるかについても、検討する。

3. 研究の方法

(1) 行動内容を測定する尺度の開発

日本国内の高校1・2年生を対象に、クローズ型ウェブ調査を実施し、360名(男性194名、女性166名)の回答を得た。主な調査項目は、藤・吉田(2009)によって作成されたネット上での行動内容に関する尺度項目を、修正・改善した28項目や、社会性および攻撃性を測定する項目などである。

(2) ネット利用が社会性・攻撃性に及ぼす影響の検討

(1) の調査から、約 12 ヶ月の期間をおいた縦断的パネル調査を実施した。すなわち、(1) で調査に回答した日本国内の高校生 360 名を対象に、再度クローズ型ウェブ調査を実施し、179 名（男性 101 名、女性 78 名）の回答を得た。主な調査項目は、(1) で開発したネット上での行動内容を測定する尺度項目や、社会性および攻撃性を測定する項目などである。

(3) 日本一韓国間でのネット上での行動内容の比較

(2) の調査実施とほぼ同時期に、韓国の高校生を対象にクローズ型ウェブ調査を実施し、300 名（男性 150 名、女性 150 名）から回答を得た。主な調査項目は、(1) で開発したネット上での行動内容を測定する尺度項目や、ネットそのものへの印象を測定する SD 法形容詞対、対人コミュニケーションに対する信念を測定する項目などである。

4. 研究成果

(1) 行動内容を測定する尺度の開発

まず、調査に先駆け、藤・吉田 (2009) が作成した項目について、申請者および心理学を専門とする大学教員の 2 名の合議により、項目表現を修正し、冗長と考えられる項目を削除するなどして、28 項目を作成した。その 30 項目について、日本国内の高校 1・2 年生を対象としたクローズ型ウェブ調査を実施し、360 名（男性 194 名、女性 166 名）の回答を得た。

ネット上での行動内容に関する項目について因子分析を行ったところ、藤・吉田 (2009) で示された因子構造とほぼ同様の因子構造（3 領域・9 因子）が示された（Table 1～3）。また、インターネット行動内容の各因子について、 α 係数を算出したところ、いずれの因子でも十分に高い値が見られた。さらに、インターネット行動内容項目と関連すると想定される外的基準との相関を検討した結果、いずれも、有意な相関係数が示された。したがって本調査を通して、十分な信頼性と妥当性を備えたインターネット行動尺度を開発することができたと考えられる。

Table 1
インターネット行動尺度・“自己の表出”
領域に関する因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
F1: 自己開示 $\alpha = .79$			
ありのままの自分について話している	.90	-.11	-.03
普段は表に出せないような自分の考えを、打ち明けている	.69	.21	-.04
自分の感情について、素直に言葉にしている	.66	-.02	.05
F2: 自己演出 $\alpha = .82$			
場面にあわせて、いろいろな役割を演じている	-.03	.92	-.05
自分がなりたいと思う人物になりきっている	-.01	.71	.03
いろいろな自分を演出している	.05	.67	.08
F3: 自己客観視 $\alpha = .77$			
自分について、客観的に考えたり感じたりしている	-.08	.04	.88
自分自身をコントロールするようにしている	.04	.03	.60
自分自身について振り返るきっかけとしている	.32	-.04	.53

Table 2
インターネット行動尺度・“他者との関係”
領域に関する因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
F1: 対人関係拡張 $\alpha = .88$			
いろいろな世代の人と、知りあったり交流したりしている	.94	.00	-.06
自分とは異なる世代や世界の人とも、つながりを持っている	.84	.02	-.01
多くのいろいろな人々と、広くふれあっている	.62	.05	.13
ネット上の友人や知人から、自分の知らなかった知識を得ている	.58	-.09	.16
F2: 攻撃的言動 $\alpha = .84$			
他人を誹謗・中傷するような発言をしている	.04	.97	-.12
相手を傷つけるような発言をしている	-.05	.72	.03
他人の悪口を言うことがある	-.02	.69	.17
F3: 所属感獲得 $\alpha = .86$			
集団の中で、仲間意識を感じている	-.02	.04	.86
『自分には仲間がいる』という安心感を得ている	.15	.00	.71
グループの一員として、自分を迎え入れてもらっている	.20	-.01	.62

Table 3
インターネット行動尺度・“現実とのバランス”領域に関する因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3
F1: 没入的関与 $\alpha = .86$			
ネットをしているときの方が、生きてるという実感を感じている	.90	-.03	.01
普段の自分の生活よりも、ネット上の活動の方に力を入れている	.79	.12	.02
ネットと日常の境目が、あいまいになることがある	.66	-.09	.15
F2: 依存的関与 $\alpha = .81$			
ネットができなくなったら、きつと耐えられない	.02	.92	-.09
ネットができない状態が続くと、イライラしてくる	.25	.62	.00
やるべきことがあっても、すぐにネットをやめられないことがある	-.23	.57	.39
F3: 非日常的関与 $\alpha = .81$			
ネット上で、非日常的な感覚を楽しんでいる	.13	.04	.65
日常生活で嫌なことがあっても、ネットを通してうまく忘れていく	.27	-.02	.62
ネット上で、日常生活でのストレスを解消している	.30	.09	.41

(2) ネット利用が社会性・攻撃性に及ぼす影響の検討

(1) で収集したデータと、(1) の調査から約 12 ヶ月の期間をおいて実施したデータを用い、交差遅れモデルに基づいて、インターネット上での行動内容が、社会性および攻撃性に及ぼす影響について分析を行った。

その結果、まず社会性に関しては、Time1 での“自己開示”によって、Time2 での孤独感が高められるが、その一方で、Time1 の“自己客観視”は Time2 での孤独感を低減してい

ることが示された。加えて、孤独感の高さによって没入的関与や依存的関与が高められるというプロセスも示された。したがって基本的には、藤・吉田（2009, 2010）が示すように、ネットが社会性に及ぼす影響の方向性（ポジティブかネガティブか）は、ネット上での行動内容によって規定されていることが明らかとなった。

ならびに、現実生活における攻撃性（特に、感情面での攻撃性）と、インターネット上での攻撃性および没入性は、相互に促進しあう関係性にあることもまた示唆された。ゆえに、Kraut, Kiesler, Boneva, Cummings, Helgeson, & Crawford (2002) が提唱した Rich get richer model のように、現実生活における攻撃性は、ネット上での関わりを通して、より増幅・極端化されながら現実生活に還元されていくというプロセスが見出された。

(3) 日本—韓国間でのネット上での行動内容の比較

(2) で収集したデータと、韓国の高校生からのデータを用い、ネット上での行動内容について比較を行った。

その結果、ネット上での“自己客観視”“依存的関与”“非日常的関与”については、日本の方がより多くみられることが示された。一方、韓国では、“対人関係拡張”“攻撃的言動”についてより頻繁に見られることが明らかとなった。ゆえに日本では、日常生活から解放され、自分を冷静に振り返る場としてネットが利用されているが、一方でネット世界への依存という問題につながりやすいことが見て取れる。これに対して韓国では、幅広く対人関係を広げるための場としてネットが用いられているが、同時に、利用者間での衝突やトラブルにも発展しやすいという特徴が見出された。これらの結果に、(2) の知見も併せて考察すれば、日本ではネットへの依存性という側面を、韓国ではネット上での攻撃性という側面を媒介して、社会性の低下および攻撃性の増大をはじめとするネガティブティが生じやすいことも予測される。

なお、こうした行動内容の違いは、第一にネットそのものに対する印象、第二に対人コミュニケーション全般に対する信念、第三に既存メディアへの信頼感の違いによって説明される可能性も示唆された。ゆえに各国の文化的特徴や社会的状況は、ネット上での行動内容に色濃く反映されていると考えられる。そして (2) からの考察を踏まえれば、文化的特徴・社会的状況によって規定された各個人の社会行動は、ネット上での様々な活動を経て、さらに極端化された形で現実生活に還元されていく可能性も推察される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 荒井崇史・藤 桂・吉田富二雄 犯罪情報が幼児を持つ母親の犯罪不安に及ぼす影響, 心理学研究, 査読有, 81 巻, 2010, 397-405.

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 藤 桂 近接被災地における twitter 利用が心理的ストレスの長期化に及ぼす影響, 第 27 回日本ストレス学会学術総会, 2011 年 11 月 20 日, 東京国際交流館
2. Fuji, K. & Yoshida, F. Short and long-term emotional effects of ruminative thoughts caused by the obscurity in cyber-bullying, 5th International Conference on The (Non)Expression of Emotions in Health and Disease, 2011 年 10 月 23 日, Tilburg University.
3. Fuji, K. & Yoshida, F. Cognition of Threat and Suppression of Consulting Behavior by Victims of Cyber-Bullying, 16th World Congress of International Society for Criminology, 2011 年 8 月 7 日, 神戸国際会議場.
4. 藤 桂 インターネット利用が社会性・攻撃性に及ぼす影響—インターネット上での行動内容の検討より— 日本心理学会第 74 回大会, 2010 年 9 月 20 日, 大阪大学.

〔図書〕(計 3 件)

1. Fuji, K. & Yoshida, F. IGI Global: Hershey, PA Cyberbehavior and its impact in Japan. In Z. Yan (Ed.). Encyclopedia of Cyber Behavior, 2012, 1305-1315.
2. 藤 桂 サイエンス社, 第 6 章 コミュニケーション: インターネット・携帯電話 (吉田富二雄・宮本聡介(編), 心理測定尺度集第 5 巻), 2011, 278-302.
3. 藤 桂 誠信書房, 第 14 章 インターネットの人間関係 (藤森立男 (編著), 人間関係の心理パースペクティブ), 2010, 212-232.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤 桂 (FUJI KEI)

筑波大学・人間系・助教

研究者番号: 50581584